

連載

熱海市立図書館 100年のあゆみ

第1回 熱海町立図書館の開設

問い合わせ：熱海市立図書館
☎0557(86)6591

熱海市立図書館は今年の11月10日で創立100周年を迎え、県内の図書館で最も古い歴史を誇ります。今月号から12回にわたり「熱海市立図書館100年のあゆみ」を紹介します。市民の皆さんに私たちの街の図書館の歴史や文化を理解していただくとともに、熱海を愛し、熱海市民の一人であることに誇りを持っていただく機会になれば幸いです。

熱海市立(町立)図書館の誕生は、熱海とともに生きた坪内逍遙を中心とした有志の寄贈図書からはじまりました。

現在の岐阜県美濃加茂市に生まれた逍遙は、東京開成学校(後の東京大学)に在学中の明治12(1879)年、病弱の長兄の湯治に付き添って初めて熱海を訪れました。熱海の温泉や歓楽の中でも純朴味の漂う雰囲気が入った逍遙は、明治

19(1886)年、妻センとの新婚旅行に熱海を訪れ、荒宿(現在の銀座町)の露木旅館に宿泊しました。



▲逍遙と妻(セン)

このころから冬の休暇となると露木旅館を常宿として熱海に滞在するようになり、とうとう大正元(1912)年には、露木旅館の主人の紹介で荒宿の糸川左岸にあった漁師の家二軒を購入して別荘とし、熱海の町の人たちとの交流も広まりはじめました。



▲常宿だった露木旅館

逍遙は、理論家であると同時に実践家の人であるといわれています。文学、演劇舞踊、美術、児童劇、ページェント、さらに教育、倫理の多方面にわたって先駆的な業績を残した逍遙は、生涯にわたって愛すと同時に、苦言を呈してきた熱海に対して多くのものを残しています。大正3(1914)年には、大正天皇の御大典に向け、熱海町でも記

念の事業が立案されました。

その一つが「図書館の設立」でした。立案者の一人の斎藤要八(「熱海錦囊」、『熱海町誌』、『熱海と五十名家』の編者)が逍遙を訪ねてその趣旨を語り、協力を要請すると、逍遙は快く引き受け、自らの所蔵する良書約3600冊と図書館用の大火鉢をあわせて寄贈したのです。それが引き金となり、石渡要吾、野田郊策、小松政一ほかの有志より寄贈された図書に町の購入図書を加えて5657冊が揃い、大正4(1915)年11月10日に、大正天皇御大典の記念事業として「熱海町立図書館」が開設されました。

図書の寄贈だけではなく、逍遙は歓楽地化してゆく熱海の文化を憂い、熱海の再生への提言も発表しています。『熱海是非』では、熱海への注文の一つとして次の言葉が示されています。

来遊者のために、又土地の男女のために、簡易なる併しながら相應に蔵書の豊富なる図書館を設けざるべからず
(熱海と五十名家より)

この言葉は、図書館の必要性を示しているとともに、熱海へ訪れる来遊者、熱海市民を思う逍遙の温かな心が伝わってきます。

市長メッセージ 88



熱海市長 齊藤 栄

この春は天候にも恵まれ、多くの来遊客に熱海を訪れていただいた結果、二つの記録を達成しました。

一つ目は、梅まつり期間中の入園者数が20万人を突破したことです。5年前(平成23年)に梅園の有料化を始めてから最高の数字となりました。今年も花付きもさらに良くなって、お客様の満足度も高かったのではないかと感じます。梅まつり期間中、大変寒い中ご協力いただいたスタッフ、そしてボランティアの皆さんに心から感謝を申し上げます。一方で梅園周辺のひどい交通渋滞や入園に時間がかかるなどの問題も生じました。これは多くのお客様が訪れたことによるうれしい悲鳴ではありますが、来年に向けてしっかりと対策を立ててまいります。

二つ目は、起雲閣の年間有料入館者数が10万人を超えたことです。14年前(平成12年)の開館以来、10万人を超えたのは初めてのことです。特筆すべきは、単に入館者数だけでなく、来館者の満足度も非常に高いという点です。起雲閣は開館当初から市が直営で運営してきましたが、平成24年度から3年間は地元的女性NPOが運営してきました。私はこのような実績が「市民参画」によって成し遂げられている点に大きな意味があると考えています。

梅園、起雲閣におけるこれらの成果は、行政と観光業界そして市民の協働によるものです。今後、この協働をさらに前に進めていきます。